傾向建築をめざして

アルド・ロッシ「設計の理論」における“テンデンツァ（傾向）”の理念

TOWARD AN ARCHITECTURE OF *TENDENZA*Theory of *Tendenza* in “Le teorie della progettazione” of Aldo Rossi片桐 悠自^{*1}

Yuji KATAGIRI

Around the birth of the idea of *Città analoga* [Analogous City], Aldo Rossi explained the term “*tendenza*”. This study discusses Rossi’s idea of *tendenza* through his writings before the XV Milan Triennale in 1973, when the movement *La Tendenza* rose. It treats the first volume of *I quaderni azzurri* written in June 1968 and the four articles of Rossi in the book titled *L’analisi urbana e la progettazione architettonica*, published in 1970 for the results of Rossi’s research group in the academic year of 1968/1969. Especially focusing on “Le teorie della progettazione”, it reflects theoretical origin of the movement.

Keywords : *La Tendenza*, Aldo Rossi, *Le Teorie della Progettazione* (1970), *Tendenza*, Theory.

テンデンツァ運動, アルド・ロッシ, 「設計の理論」(1970), 傾向, 理念.

序論

1966年から1971年まで^{注1)}母校・ミラノ工科大学で教鞭を執ったアルド・ロッシ(Aldo ROSSI, 1931-1997)は、学生時分の1957年前後からイタリア共産党 (Partito Comunista Italiano, 以下 PCI と表記) に党籍を置き^{注2)}、1971年11月に同校の正教授職を懲戒免職されるまで共産党員であったとされる^{注3)}。当時の PCI で有力な若手建築家の一人にあって「ガララテゼの集合住宅」(1969-1973)の設計にロッシを招聘^{注4)}したカルロ・アイモニーノ(Carlo AYMONINO, 1926-2010)は、1973年の第15回ミラノ・トリエンナーレで発足し、ロッシが主導的な役割を担った建築運動「テンデンツァ *La Tendenza*」を振り返り、以下のように述べる。

「私達は皆共産主義者でした…ニーノ・ダルディも、ロッシも、私も、グイード・カネッラも、ヴィットリオ・グレゴッティも。[...] もちろん、(ジャンウーゴ・)ポレゼッロも。」^{注5)}

「テンデンツァ運動」の周辺人物には、こうした「共産主義者」以外にも、ロッシがミラノ工科大学の教員として牽引した「探究グループ」[Gruppo di ricerca diretto da Aldo Rossi]^{注6)}の助手としてジョルジョ・グラッシ(Giorgio GRASSI 1935-)、アントニオ・モネステイローリ(Antonio MONESTIROLI 1940-2019)、マッシモ・スコラーリ(Massimo SCOLARI 1943-)らが関与していた。ロッシの探究グループの研究成果は、1970年3月に『都市分析と建築設計 *L’analisi urbana e la progettazione architettonica*』として出版された。これは、1968年秋から翌1969年夏までの1年間の学期に行われたグループのセミナーの内容が元になっており、グループ主管の教授であるロッシによる著述は、「まえがき *Premessa*」の他、「我々の研究目的：講義 *L’obiettivo della nostra ricerca. Lezione*」、1969年7月の

講義「建築における社会主義都市の理念 *L’idea di città socialista in architettura*」、「設計の理論 *Le teorie della progettazione*」の4つが収められた。

アンドレオーラ女史の博士論文(2015)が指摘するように、ミラノ工科大学で教鞭を執った時期のロッシの教育は、彼自身の政治的積極性と不可分であった^{注7)}。1973年の第15回ミラノトリエンナーレ以前に、ロッシが建築理論として検討した「傾向 *tendenza*」(概念)なる術語は、「類推的都市 *città analoga*」や「合理主義 *razionalismo*」といった理論的概念を解明する上で、重要なタームであることは間違いないだろう。しかし、ロッシによる言及から「テンデンツァ *la tendenza*」(傾向)を踏査し、その理論的解釈へと踏み込んだ研究は管見の限り見当たらない。

そこで、本論は1968-1970年のミラノ工科大学教員期にロッシ自身が言及した「傾向(テンデンツァ)」の理念を検討する。資料としては、『都市分析と建築設計』所収のロッシのテキストおよび1968年6月から書かれたロッシの手記『青のノート *I quaderni azzurri*』(全47巻、以下 QA+巻号と表記)の第1巻^{注8)}を扱う。

まず『都市分析と建築設計』に先行する QA1 の記述を概観し、術語「傾向 *tendenza*」を検討する。次に『都市分析と建築設計』を扱い、特に「設計の理論」と題された講義を対象とする。そこから、具体的な展開としての「建築における社会主義都市の理念」を扱う。そして、1969年の「類推的都市 *città analoga*」概念導出と並行して、「傾向 *tendenza*」の理念が講義の中で深化させられたことを示す。対象資料は訳者表記なき限り筆者が訳出を行っている。

第1節では、『都市分析と建築設計』の直前に書かれた『青のノート』第1巻を扱う。このノートは、筆跡から判断するに、1968年

^{*1} 東京都市大学建築都市デザイン学部建築学科 講師・博士(工学)

Lect., Dept. of Architecture, Faculty of Architecture and Urban Design, Tokyo City University, Ph.D.

6月19日の1日でノート1つ分に書き込みがなされており、「教理問答」と題され、後続する他のノートとは異なる構成をとっている。そこで、論じられたキーワード『類型学 *tipologia*』、『進歩 *progresso*』、『設計の理論 *La teoria della progettazione*』、『傾向 *tendenza*』に焦点を絞り、ロッシの建築設計理論を解釈する。

第2節では、『都市分析と建築設計』から、ロッシが主導した探究グループの意図を把握する。ロッシが著した2つのテキスト「まえがき」「我々の研究目的：講義」から、探究グループの前提として〈傾向 *tendenza*〉概念がロッシから提示されたことを論じる。

第3節では、1969年7月の後半の講義「設計の理論」における傾向概念を扱う。ロッシは、1960年代に「反動的」とみなされるような建築的事例を拾い集め、それらに「歴史の正確なモメント」が実証されるという「傾向」を論じている。特に、当時のイタリア建築界の主流をなすモダニストらのマルクス主義の文脈への対抗を示し、ロッシが反動的な建築表象に逆説的な革新性を見出していたことを論じる。

第4節では、グループで共有された「傾向」の表出例として1969年7月の前半の講義「建築における社会主義都市の理念」を扱う。特に本講義におけるアイモニーノとレオナルド・ベネヴォロ (Leonardo BENEVOLO 1923-2017)の議論の参照を確認し、「社会主義都市」理念における系譜学的位置づけのうち、議論のオリジナルな内容を検討する。また、末尾のロッシによるトロツキーの一節の原著『文学と革命』を参照し、「傾向建築」の意図を論じる。

1. QA1(1968年6月)における「傾向」概念

1-1. QA1:『類型学』：建築のフォルマリズム理論と数学的思考

本節は、1968年6月19日に書かれたQA1の「教理問答」^{注9)}の『設計の理論 *la teoria della progettazione*』を中心に考察する。ロッシは、キーワードを黒太線の四角で囲み、ノート上で問答を行った。ロッシ自身のキーワードを内省的に強調する黒太線の四角囲みを、以下邦訳では二重甲括弧『^{注10)}』内^[]内の原文併記の斜体で示す。なお、細い線で囲まれた符号は一重下線で示す。

「建築の理論[*Teoria dell'architettura*]

形態-形式としての建築 [L'architettura come forma]。

分析 [Analisi]。

建築のフォルマリズム理論 [Teoria formalista dell'architettura]

『類型学 *Tipologia*』

類型学上の問題は、その根[radice]に還元されるはずである。類型の根とは、形態-形式[forma]である。

建築の構築における様々な操作を許容する基本的な幾何学要素を仮定する。類型学は、形式の構築の論理的モメントを構築する。」(ROSSI, QA1)

このノートの「教理問答」において、ロッシはまず建築設計教育上の『類型学』を考察する。類型学上の問題にまつわたるところの「根 [radice]」「形態-形式[forma]」には、経験と不可分であるところの建築設計において、論理的に説明可能な「瞬間-契機」へ到達するための道を示そうとする意図が見られる。

ここでの『類型学』は、建築分野における数学的な自明性を探究することに近い。柱、壁、階段などの「建築の要素」は数学記号の $x, y, z, \dots$ と似て、それ自体で内容をもたず、形式的に考察される。

「分類ならびに一覧表 [Classificazione ed elenchi]によって、事例が得られ、使用の可能性が提示される。ある形態における一つの使用の可能性 [una possibilità di uso]は、まさに機能の問題である。

機能によって形態が与えられることはない。しかし、いくつかの場合において、形態は、その使用の可能性[sua possibilità di uso]に結び付けられる。」(Ibid.)

ロッシにおいて、機能主義的な決定論以上に設計の本質をなす「分類」が、設計の重要な過程をなす^{注11)}。ここでは、ある歴史的アーカイブを構成する形態の中から、「使用(用途)の可能性」を揭示する形態が選定される。それこそが、「使用」に先行する「分類ならびに一覧表 *Classificazione ed elenchi*」である。続く『構築 *costruzione*』は以下のようにロッシは述べる。

「建築の要素それ自体では、内容は存在しない(例えば円柱は、それ自体で悪でも善でもない。つまり倫理的判断は不可能なのだ。)このような形式的方法のなかでは、建築は数学に似る。」(ROSSI, QA1)

円柱や壁といった建築の既存の形式それ自体の善悪を問うことは意味がない。設計は、一意の機能によって決定されるのではなく、形式それ自体が成立してはじめて、「使用の可能性」を提示する。

こうした「分類」「使用の可能性」に関しての教理問答的思考は、「トリノのチェントロディレツィオナーレ」「クネオの対独パルチザン記念碑」(1962)などで協働し、1960年頃にロッシと設計事務所 SDA を設立したジャンウーゴ・ポレゼッロ (Gianugo POLESELLO 1930-2007)にも見られる。ムラトリー学派の議論をロッシに教示したポレゼッロ^{注12)}は「設計の分類 *La classificazione del progetto*」(1992)において、以下のように述べる。

「まちがいなく、一般的な建築の設計とは、“スケール”[“scale”]によって識別可能であり、構築のフェーズ内で用いられる技術と掛け合わせられ、用途などの概念^{カテゴリー}と掛け合わせられる。それらは、(都市的または非-都市的な)コンテクスト内の存在、“支配的な”図像、モニュメントとして在ろうとする要求などに由来し、または提案される関係性に従い、分類されうるものである [possono essere classificati]」(POLESELLO, “La classificazione del progetto”, p.14.)

ポレゼッロは、特に建築設計をそれ自体として識別する「スケール」、「使用」や「技術」といった複数の概念(カテゴリー)のうちに、「分類 *classificazione*」がなされることに着目する。「スケール」を介して、概念間の結合が解釈され、「分類」される。ここで図像は、幾何学として洗練された数学的解法のように選定される。その意味で、両者の設計の形式的方法は、数学的手法と類比のうちに自覚されたのである。

1-2. QA1:『進歩』；決定論批判と個人の選択

『類型学』に続けて、『進歩 *progresso*』、『歴史 *storia*』、『批評 *rilievo*』について、それぞれ考察がなされる。直後の、『進歩』については、以下のように述べる。

「『進歩 *progresso*』

建築における進歩は、ある道徳的観点または美的観点、いわんや技術的観点から導かれる進歩ではない。建築の進展とは、その内容ないし歴史的モメントとしての集合的記憶の進展 [progressività dei suoi contenuti, come delle coscienza collettiva momento storico]である。(アントリーニ、ブーレーなど、[訳補：エルンスト・]マイ)

建築の決定における唯名論的位置づけ[una posizione terministica]は、まったく意味をなさないのだ。

反対に、個々の建築の研究に基づいた、人間性（都市）についての位置づけが重要である。」(QA1)

ここで言及される「唯名論的」^{注13)}位置づけは、室機能名称をつけることで“設計がなされた”とみなす教育への批判と考えられる。

「建築の進歩」は、ロッシにとって個人の史観に強く結びつく。例えば、1989 年の小論「見えない距離」では、「進歩 progresso」は「成長 crescita」と言いかえられ、「少年時代の喪失 la perdita dell'infanzia」であると述べる^{注14)}。いわば、芸術家や建築家の「進歩(成長) progresso」は、それ自体作品制作のモメントとして、内的に観測可能なものとして表現される。

1-3. QA1: 『傾向』 / 『自伝』 : 形態-形式の固定と選択

芸術家個人の内的な状態のなかで、人間の選択を変えることが「企図-設計 progetto」にとって本質となる。こうした『進歩』を伴うモメントとは、続けて論じられる『設計の理論 Teoria della progettazione』へと敷衍される。

「『設計の理論 Teoria della progettazione』

(ブーレーを参照)

(設計の理論と建築の理論)

ある設計の理論とは、作品を参照するはずである [Una teoria della progettazione deve riferirsi alle opere]。唯一、作品についての分析のみが理論を支えることができる。人がこれに固執しなかったとき、いわゆる文学的素養に収まってしまう。作者が作品の決定を選択するとき、彼は一つの『傾向』[una tendenza]を決定する。傾向は、一連の形態や特定の結果に関する統一された推移である。

ある理論は、理論が特定の操作に結びつけられた作品について私達に語りかける場合、十分に重要なものとなる。これはつまり、理論の作者が、特定の複数の作品を、説明するときである。」(Ibid.)

形態-形式に至るまでの内的な過程が、事後的に「傾向 tendenza」として捉えられることで、自伝的な心の動きの選択が観測可能となる。つまり、この『設計の理論』とは、作品に関し、作者が決定をなす際に、制作者自身に語りかけるディスクールとして解釈される。観測される前には定まっていなかった心の動きを観測するには、イメージの固定、これ以上説明できない形態-形式に至る必要がある。それゆえに、過去の作品についての分析が重要になる。

「すべての作品は、建築的理念についての一つの『自伝 autobiografica』の内部において、考察される。設計は、概念と感情の統一されたコンプレックスをなす。実際これは、形式-形態のうちにある[nella forma]、あらゆる相対的な（概念と感情の）変容の可能性[possibilità di trasformazione (nozioni e emozioni)]である。」(Ibid.)

『傾向』は、作品と作者が不可分であるところの、『自伝』性と結びつく。構想段階または記憶の段階の作品は、作者自身が抱える『自伝』の内でのみ観察可能である。この「理論」は、必ずしも言語化されない幾何学形態や、形状すらないイメージも含まれる。

「(ある建築家の) 第一の建築的な感情とは、ある形態-形式[una forma]である。形態とは、それゆえに、あらかじめ選ばれた要素によって確定する。設計の過程でそれは次第に変化するが、しかし、この変化はすべて、建築についての統一された観念の内部にある。

芸術家はそれゆえに、いつも一つの問題に固執するのだ。(イメージの固定[fissità dell'immagine])」(Ibid.)

建築家が設計を進めるに従い、形態は変化する。しかしながら、形態はある限定された、建築家自身の建築的観念のなかで行われ、それは一つの枠組みの内部にある。建築家が一つの問題に固執する過程で至る「イメージの固定」とは、いわば心のフラスコで変容するイメージが平衡状態に至る過程であるといえよう。

1-4. QA1: 『設計の理論』 : 形態-形式の固定と「選択と傾向」

設計教育において、形態における判断は、制作者のもつ思想（概念）や気分（感情）を反映する。ここに、数学的抽象化にも似た、形態-形式の表現の可能性が示される。

「ある問題が想定される。しかしながら、あるエレメントが固定化されるということは、また、一つの意識の様態 [un modo di conoscenza]である。それは、体系[sistema]の内部で、あらゆる描写の可能性を仄めかすのだ。」(Ibid.)

それは移ろいゆくものであり、「変容の可能性」をもつならかの形態やエレメントを固定（決定）するとき、それは人間の心の中にある一つの様態が表現されたものである。一つの意識の様態の固定であるにもかかわらず、何らかの体系やシステムを語り尽くしてしまい、これ以上言葉で説明できないような状況へと到達する。一つの抽象化の形式であると同時に、ある体系-システムにおける「あらゆる描写の可能性」を仄めかすような抽象化である。特に建築家や芸術家においては、何らかの形態-形式の選択において、一つの問題に固執するうちに何らかのイメージの固定がなされる。

「選択と傾向 [Scelta e tendenza]は、いずれにせよ、これ以上分析不可能な事象 [un fatto non ulteriormente analizzabile]である。また、形態-形式 [la forma]もこれ以上分析不可能な事象である。」

人間個人の都市認識の個別性に基づき、内面の中で「選択と傾向 scelta e tendenza」が観察される。一つの心の動きの過程—「傾向」は、「形態-形式 la forma」として固定されたときに初めて、観測可能なものである。それは「形態-形式」を「選択」する過程の帰結として、これ以上説明できないようなものであり、「設計の理論」を観測可能な状態へと至らせる内的な働きである。それは「形態-形式」として選択したものとみなされ、ある「傾向」を表象する。

2. 設計教育論としての『都市分析と建築設計』

2-1. 「まえがき」: 〈傾向 tendenza〉の提示

『都市分析と建築設計』はロッシの「探究グループ Gruppo di ricerca」の 1968/1969 年の学期における成果を書籍化し、1970 年 3 月に出版したものである。「まえがき」のあとの、「序文」（著者名なし）でロッシは以下のように述べる。

「講義と討議で醸成された研究の理論的レファレンスは、ある面では実証主義的描写の定立化であり、別の面ではマルクス主義的構造分析と結びついた定立化である。」(“Introduzione”, p.12.)

当該書においては、従来の歴史学-建築史的な「実証主義的描写」ならびに理論的な「マルクス主義的構造」を止揚し、都市調査それ自体ではなく、その理論的位置づけを言語化することに焦点が絞られる。同時に、「まえがき Premessa」では〈傾向 tendenza〉について以下のように述べる。

「私が見るに、7月のセミナー（訳補：1969年7月）において、本グループの協働の批評的モメント[il momento critico del lavoro collettivo del gruppo]が出現し、傾向と選択のさらなる確定[un'ulteriore precisazione della tendenza e delle scelte]が示された。傾向と選択は、設計が進んでゆくとき徐々に、最初の設計から現れる。〈傾向〉の定義[La definizione della tendenza]（斜体ロッシ）を、その場しのぎのマニフェストを超えて、ある多面的な研究労働の成果を通して、それでも確定しなくてはならないのだ。」（ROSSI, "Premessa", p.8.）

ロッシは〈傾向 *tendenza*〉と斜体で強調した上で、探究グループにおいて、この術語が「その場しのぎのマニフェスト」とは異なる意義をもつことを示す。1968/1969の学期直前にQA1で言及された「傾向と選択」を発展させたものであると考えられる。つまり、自伝的な心の動きは、それぞれの人間に内在する異なるものであるが、芸術家として建築を探究するにあたり、個々の「自伝性」が存在する。学生、教授、助手それぞれが対等な個人として、芸術家としての探究を行う道標を提示する意図があったといえる。

2-2. 「我々の研究目的：講義」：傾向概念における対抗理念

1968年秋に行われたと考えられるグループ全体の冒頭講演「我々の研究目的：講義」のなかで、ロッシは、以下のように述べる。

「分析は、それが現実に関する科学と選択となるにつれて、計画[il progetto]となる。例えば、我々の研究において、ミラノの地図上にかの優位性[questa preminenza]をもつとみなせるアントリーニの計画とは、計画として再提案される方法のうちにある建築の一つの選択なのだ。」（ROSSI, "L'obiettivo della nostra ricerca. Lezione", p.13.）

『都市分析と建築設計』の表紙には、G.A.アントリーニ(Giovanni Antonio ANTOLINI 1756-1841)の「フォロ・ボナパルテ」計画が置かれた。この計画はミラノ中心地から北西の方向に巨大な円形状の広場をおいた計画案である。なお、アントリーニの計画はナポレオン施政下での巨大な権力の行使として都市改造を目論んだものとして『都市の建築』で参照されている^{注15}。これはナポレオンという、マルクス主義的文脈で“反動勢力”に建築家が与した事例であるものの、地理的・地政的な「優位性 *preminenza*」をもつ。

「計画がそれ自体を構築することとは、その歴史的・合理的な現実のうちに、あるよく知られた一連の要素の内部において[all'interno di una serie di elementi conosciuti]、一つの選択を表象する。この建築の理論が、一つの傾向として[come una tendenza]として大枠を描くのは明白である。我々の研究の使命とは、この傾向の境界[i limiti di questa tendenza]を定義することであり、傾向の内部において、発展的・潮流的な一つの線の可能性を判断することである。その意味で、私たちは、芸術の発展的特質、つまり、一つの傾向の決定的な特質に[dei caratteri progressivi dell'arte; e dei caratteri decisivi di una tendenza]執着している。」（*Ibid.*, pp.13-14.）

アントリーニ自身が実際にボナパルティストだったかどうかとは別の次元で、「フォロ・ボナパルテ」計画それ自体がアントリーニの内面にある「ある一連の既存の要素」の選択を表象している。同時にこの選択は、アントリーニ自身の「傾向」として他者に観測される。それは、一人の芸術家の発展的形質として、ある内的なプロセスの観測データとなる。こういった芸術家の傾向を観測することを蔑ろにしてきたのが、モダニズム運動の建築教育であるとロッシは続けて、糾弾する。

「現代建築の悲惨とは、実際、（歴史の）結果や、内容の乏しさや、正確な傾向の欠如や、モダニズム運動に引き摺られた悪しき理論的仮定以前の段階に未だある。これらの理論的仮定は、しばしば信頼にたるものとされ、意識的にしろ、無意識的にしろ、機能主義のうちにある。教育法として機能主義的実践のうちに[Nella pratica professionale come nella didattica]、機能主義の反復が、計画へと至る最短の近道の一つを表象してきた。致命的に旧来的で、政治的・文化的発展から切り離されたやり方であるところの〈基準〉[standards]のディスクールに支えられてきたのだ。[...]ここから我々の〈機能主義〉への闘争[la nostra lotta al professionalismo]が生成する。つまり、一切の道德順応主義的基盤を持たない反対勢力[opposizione]である。現実を一つの図式に還元するような立場をとって、大学の建築教育の自由な研究と弁証法的発展を阻むような立場を避けんとするものである。」（*Ibid.*, p.14.）

現代の建築教育における「機能主義」や「現実の一つの図式への還元」にロッシは反対する。モダニストの建築家・教授たちが推進する機能主義的建築が「最も正しい」とする教育への反対である。

「建築史の作品群は、建築を形作る。その作品群の内部で、選択を操作する必要がある。同時に、その内部で、傾向が一つの意味をもつのだ[anche all'interno di esse è necessario operare una scelta, anche all'interno di esse ha un significato la tendenza.]」（*Ibid.*, p.14.）

設計を行うにあたり、建築家は、20世紀の機能主義的建築/モダニズム建築に限らない、自己の歴史的アーカイブを参照している。意識的にせよ、無意識的にせよ、自己の内部での「選択」は、ある「傾向」として指し示され、ロッシにとっての「合理性」のうちにある。

3. 「設計の理論」における「傾向」概念

3-1. 都市変容の表象：力-諸理念[idee-forza]としての「傾向」

1969年7月の講義「設計の理論」でロッシは、それまでの学生の発表を踏まえ、既存のマルクス主義的文脈で反動的内容を示すと考えられるものが、進歩的な内容をもつという事例を示す。

「大きな変革の社会状況に向かったアントリーニのそのように、一人のパーソナリティの執念から計画の力強い特徴が与えられると再度指摘するのは有益である。つまり、この（訳補：アントリーニのフォロ・ボナパルテ）計画には、完結した事物として都市の部分の総体の予示を可能にするような、普遍的特徴づけの力-諸理念[idee-forza]を経由する、明確な設計の指標が存在する。いわば、この理念は、平面とピンケッティ[Pinchetti]の地図のうちに、地理学的な現実として圧倒するに足る現実的な建築の力を提示している。また、都市の連続的な変容のうちに、作用する建築の力であるともいえる。」（ROSSI, "Le teorie della progettazione", p.117.）

アントリーニの計画は、地理的・地政的な「力-諸理念 *idee-forza*」を表出し、地図上の平面に「優位性」、いわば“絶対的 *absolute*”^{注16}な力が働いている。建築は観測者であるところの人間によって把握され、「完結した事物として都市の部分の総体の予示を可能にする」。同様の計画の例として、オースマン男爵によるパリの改造が挙げられる。

「オースマンの計画は、コンポジションのうちに、自然と建築の関係性と道筋を、最も明らかな形で提示する。この自然的エレメント

に関する研究は、表象-表現[rappresentazione]の技術としての、設計の理論[la teoria della progettazione]をなしているのだ。たとえ、周辺環境が全く歪められ、計画に心理的な強い圧迫感を担わせたとしても。」(Ibid., pp.121-122.)

こうした図式をもつ建築の「力-諸理念 idee-forza」が観測されるとき、「建築の合理性 razionalità della architettura」概念が現れる。「傾向 la tendenza」はこの「合理性」を基礎として現れる。建築家の政治的立場と別の次元で、変化する都市の歴史的契機を描く「正確なモメント」を表現する建築が選択される。

「建築の合理性に、そして建築の合理性の意味に定礎されると同時に、建築学分野のうちに、また都市の変容のうちに、決定づけられることが可能な力-諸理念 [idee-forza]が存在するという信念のうちに定礎されるのが、傾向[la tendenza]である。」(Ibid., p.127.)

ここで、アントリーニの「フォロ・ボナパルテ」計画やオースマンのバリ改造が、都市の史的モメント、「力-諸理念 idee-forza」を表出する建築として把握される。ロッシが語る「傾向 tendenza」は、ある種の図的表象のもつ「力-諸理念」と結びつけられ、説明される。ゆえに、オースマンやアントリーニによる「反動的」な計画案をロッシは「歴史の正確なモメント precisi momenti」(Ibid., p.110.)を捉えた「進歩的な progressive」内容をもつ提案として、評価した。

3-2. ヘーゲル観念論と実証主義

こうしたロッシの時代精神の表出への評価は、弁証法的思考に彼が慣れ親しんでいたことも大きい。当時の PCI 主流の建築家のマルクス主義的文脈では評価されない「反動勢力」の計画を評価する視点は、E.L.ブーレーの提案の評価についてのロッシの特有の建築論へと敷衍される。

「つまり、フランス王とヴェルサイユの貴族たちのために着手された設計群は、革命委員会にむけて提案されたのだ」(Ibid., p.116.)

ロッシは、ブーレーが革命によって起こる社会的変化に無関心であったと述べる。にもかかわらず、ロッシにとって、アンシャン・レژیムの体制中にブーレーが提案した数々のモニュメントは、フランス革命という「瞬間-契機」を正確に表現したものとして捉えられた。ここに時代精神の抽出に関する強い関心が表れている。

「19 世紀のブルジョア文化のなかでは、かなり確かなモメントのうちに、建築教育において根本的なイデオロギー的参照点が二つ現れた。一つは、ヘーゲル観念論で、もう一つは実証主義である。これらのイデオロギー的参照点は、両者ともに建築において、科学においてと同様、とりわけ実証主義的な著作を参照すると、分類の操作のうちにその適用が存在する。それはつまり、形式と実在するデータの分類である。」(Ibid., pp.118-119.)

19 世紀以降、実証主義と並び、建築教育に強い影響を及ぼしてきたのはヘーゲル観念論であるとロッシは論じ、両思想に共通する「分類の操作」を見出す。〈正〉-〈反〉-〈合〉という弁証法的思考は、ある種の思考の分類の過程であるが、そこでは、実証主義的一覧表化の操作、一望化の操作が複雑に結びつく。特に建築史の中でのアーカイブ化のうち、実証主義とみなされる建築家の探究として、ミリツィアとデュランの著作が挙げられる。

「ミリツィアからデュランへ至る学術的著作では、両者は大いに異なるものの、建築の意味の統一へと至る絵的な（描写された）エレ

メント[gli elementi descritti]を参照し、ある傾向[una tendenza]の内部へと作用していながら、実在する世界の中立化した描写として提示される実証主義的著作である。」(Ibid., p.119.)

実証主義は、弁証法と同様の「分類」を実行する形式をもった思考であると思なされる。ロッシはヘーゲル観念論における「分類」の姿勢を、デュランやミリツィアの著作に見出す。建築の要素をグリッド状に分節された一覧表は、それ自体で“実証的”であると思わせる力をもつある傾向[una tendenza]をもつ。同一スケールの平面図の一覧表というダイアグラムのうちにモデル化された世界には、「実証的である」と思わせる力がある。

抽象化された図面を同一スケールで並べるデュランの一覧表化の手法においては、何らかの「傾向」への意図にもかかわらず、「形式と実在するデータの分類」がなされる。ここに「実証的」と認識されるような個人的探究の一望化がなされる。

3-3. バウハウスの建築教育におけるヘゲモニー

続けてロッシは、19 世紀の建築文化のイデオロギー参照点の継承として、20 世紀の支配的なイデオロギー的系譜を考察する。

「モダニズム運動にあつては、個々の芸術家群のパーソナリティ、対抗的な伝記に加えて[oltre alle personalità dei singoli artisti, alle opposte biografie]、大多数の証拠をもって、現代世界のイデオロギー的闘争の全てが立ち現れている。その世界の内部には、反動的なエレメントかつ今日にいたるまで明確にされつつある進歩的なエレメントが存在する。」(Ibid., p.123.)

モダニズム運動における「反動的」かつ「進歩的」エレメントとして、教育におけるヘゲモニーを継続してきたバウハウスならびにグロピウスによる教育について言及する。

「この限りで、コンポジション教育を見る限りで特筆すべきこととして、大多数を先導し自己決定を求めてきた立場とは、間違いなく、〈バウハウス〉[bauhaus]の政治的立場である。より正確にいえば、グロピウスの政治的立場である。グロピウスによる教育とは、〈手法〉について、建築家の自己形成について、さらには決定された建築の教育に裏付けされたものである。グロピウスの手法の裏に見受けられるのは、建築の研究の再建を企図することであり、同時に一つの科学として認識可能な建築の意味の探求を企図することである。『趣味だとか感性などという言葉、客観的正当性のある言葉に置き換えねばならない。物理的・心理学的なファクターを伴う生物学的ファクターに基づく、新しい視覚的言語は、続く世代の総体的かつ非個人的な経験を表現することに向けられる。これこそ、真の伝統が根ざすところなのだ。』」(Ibid., pp.123-124.)

「建築の研究の再建」「科学として認識可能な建築」を目指す点で、ロッシはバウハウスおよびグロピウスの教育的立場を評価する。一方で、その教育手法は「建築のプロセスから建築の発明へと至る論理的説明」には至っていないと指摘する。

「しかし、アドルフ・ロースと全く異なる道を歩んできたグロピウスにおいては、建築のプロセスから建築の発明へと至る論理的説明を示すには至らなかった。グロピウスにとって、手法の回復は、才気すなわち並外れた個性、つまり建築については予見できない決定的な貢献を通じてしか取り扱えない。つまり、グロピウスの手法への過剰な賞賛は、彼の方法の支持者であったエルネスト・N・ロジェルスのような合理主義の巨匠に見られるものであるが、それ

は、ル・コルビュジエへの賞賛と同じようなものであろう。理論のモメントと設計、つまり芸術と職人仕事の断絶を考えることなしに、あらゆる作品に付随する論理的定式化のうちに、もはや、あのフランスの巨匠（訳補：ル・コルビュジエ）こそ最も重要な学びがあるというように認識することはできない。ここから、古代とモダニティのジレンマ、いわば自伝的経験を通じた、分析と設計のジレンマが現れるのだ。」（*Ibid.*, p.124.）

ここで、ロッシは神話化され、“正しいモダニティ”の伝統として、建築教育に君臨していたル・コルビュジエの特権性に否定的である。これは、ロッシ自身の、師ロジェルの教育からの脱却も兼ねている。PCI 所属の建築家やモダニストがバウハウスやコルビュジエの形態こそが「革命的」であるという“正しい建築教育のあり方”に、ロッシは反感を抱いていた。彼の場合、コルビュジエからの学びは、ブーレーとルドゥーの対比において、前者が近代建築の巨匠に類似すると把握するに至る、自伝的な過程の内にある。

3-4. パウル・クレーの「傾向」

ロッシはバウハウスやル・コルビュジエ^{注17)}の造形に関心を抱いていたものの、彼らを「正しい建築」として強制する、当時のイタリア建築界で共有された教育のあり方に否定的であった。

「設計の理論」の論が進むに従い「ある傾向 una tendenza」は、「（全般としての）傾向 la tendenza」へと深化させられる。ロッシは、バウハウスに属しながら、バウハウスのものと異なる方向性を目指した教師クレーに着目する。ロッシにとって、クレーは大学教師としての教育上、重要な「瞬間-契機」を示す芸術家であった。

「ある別の傾向[una diversa tendenza]を示すかもしれないが、これ（バウハウスまたはグロピウス）と類推的に接続される探究として、パウル・クレーによって導出された探究があると考えている。モダニズム芸術の歴史的限界の一つとして根ざすところの方法からの才気の開放は、クレーにとって、彼の絵画、客体化された教育、彼自身の日記^{注18)}からなる不可分な様態のうちに作り上げられたある探究を経由して、（訳補：芸術の）コンポジションの論理および何らかの自伝性の単一の統合のうちに、ある一つの特定の作品の説明となる。既に述べたように、傾向の論理的構築[costruzione logica della tendenza]に関するクレーの能力は、芸術の進歩性の一つの特徴づけをなす。まさにその能力が歴史の流れのうちに、モメントと作品へと関連づけられる方法であると考え。」（*Ibid.*, p.124.）

ロッシのクレーへの称賛は、彼の『日記』における個人の内部の探求へと向かう芸術家の性向が、文章で表されていたことと関連付けられる。構成（コンポジション）をカリキュラムとして強制するバウハウス式の教育に対し、画家クレーは、個々人がどのような心の動きで、創作活動に向かったのかを描出する「正確なモメント」を重視する。ロッシは、ここで、クレーの教育に「傾向 tendenza」への志向が現れていると論じる。自らの心の動きを、正確に言葉で描写した画家は、大文字の「傾向 la tendenza」を志向していた。ここにロッシが用いる定冠詞付きの「傾向 la tendenza」が芸術家や個人の心と密接に結びついていることが示される。

3-5. 文学的党派性としての「傾向」

続けて、モダニズム運動の作家個々人の特徴について、分析を行うことを提案している。ロッシは芸術家や文筆家、そして建築家の心の動きが言語的に表出されることを重視する。

「このコンセプトについて、作品（建設されたプロジェクト、計画案、著作）を通じたモダニズム運動の様々な個人性についての分析がなされなくてはならない。我々によって表明された、傾向（テンデンツァ）という術語のより明晰な理解に到達するためにも。その遺産がすっかり失われ、歪められてきたモダニズム建築において、何らかの存在感を未だに作りだしているのが、ロース、ル・コルビュジエ、ヒルベルザイマー、クレー、（訳補：マックス・）エルンストらである。もう、ル・コルビュジエとブルータリズムの関係性を考えるなんてやめたまえ。

そうだ、この探究は、我々によって初めて着手されたのであり、建築を構築する感覚のうちに、導かれるはずである。それゆえに、作品の分析は、我々の研究の独自性となる。」（Rossi, *Ibid.*, p.124.）

ロッシは、特にブーレー^{注19)}とクレーの、芸術家の文筆家としての側面に興味を抱いており、彼らの日記を参照する。そこで共有された「傾向」を「文学的党派性 la faziosità della lettura」と呼ぶ。

「まさにこうした理解のうちの傾向、つまり文学的党派性[la tendenza nell'interpretazione stessa, la faziosità della lettura]は、我々の建築の構築のために必須の特徴となる。歴史・都市・設計についての我々のディスクールは、史学的でも批評的でもない。それは、ある選択の内部へと構築されたディスクールなのである。それは傾向[la tendenza]を構築するための存在のあり方に資する。実際、この選択は、歴史の内部へと向かい、そして根本的な特徴を獲得する。我々が迎える遺産こそ、同時に、我々の傾向[la nostra tendenza]それ自体なのだ。」（*Ibid.*, p.125.）

一つの文学的傾向を表す「傾向」は、建築設計者にとっても重要な意味をもつ。歴史の内部、都市の内部での選択は、個々人の「傾向」を指し示す。過去の建築的アーカイブの中での選択を通じて、個人内部でのディスクールへと至る道筋が指し示され、「文学的党派性」、つまり集合的意識へと至る。探究グループで共有された「我々の傾向 nostra tendenza」とは、芸術家の個人史的感覚の抽象化として捉えられるという意味で、「傾向」は他者と共有される際に、「文学的党派性」として、理解されるものである。

4. 「建築における社会主義都市の理念」における「傾向」の表出

4-1. カルロ・アイモニーノの参照：トニー・ガルニエ

ロッシのグループの“文学的党派性”とは、「設計の理論」の前に行われた講義「建築における社会主義都市の理念」に現れる。冒頭で社会主義都市は「現実の都市の歴史のうちに存在しない」とロッシは述べ、ソ連の都市を重要な参照点として評価する。

「社会主義都市は、ゴシック都市、反宗教改革の都市、ブルジョア都市に関わる場所では、現実の歴史のうちに存在しない。唯一の現実の参照点は、社会主義国家の都市のうちに表現されるのであり、特にそれはソヴィエト連邦の都市に現れる。この経験は（都市的事象の構造改革の期間という点からは）あまりにも最近のものであるが、万人が認めうる参照点およびデータを我々に提供する。」（ROSSI, “L'idea di città socialista in architettura”, p.41.）

この講義は、グループ内の「傾向」の一例を示す、主管教授のロッシの「社会主義都市」概念の系譜学として解釈できる。講義の前半は、エンゲルスとブルードンの論争から、主流のマルクス主義的文脈から見放されていた思想家のユートピアを再検討することに充

てられる。後半はレーニンの『経済学的ロマン主義の特徴づけによ
せて』を引用し、社会主義都市の発展の考察に充てる。特に冒頭の
トニー・ガルニエ「工業都市」に関する記述は、先行するアイモニ
ーノの講義を援用している^{注20)}。

「計画全体が描かれたにもかかわらず、個別的かつ特定の事物が存
在するために、明確に個別の表現的な形態が考慮される。これが可
能なのは、ガルニエが、経済的・技術的關係性と個々の構成の關係
全てにおいて、（住居量と都市設備という）2つのファクターの独
立性を受け入れず、都市発展のコンポジション上の規則[metro
compositivo]のような自己充足的コンセプトを引き受けることを拒否
し、計画することで、相互依存関係を強調したからである。」
(*Ibid.*, p.43.)

つまり、複雑な仮定を経た歴史を、抽象的に切り取る際に、「明
確に個別の表現的な形態」が採用され、ある都市の「傾向」が表現
される。この説明は、ピラネージが「カンポ・マルツィオ」で、考
古学的復元をもとに、個々の建物を強調するような形で独自の都市
図を作成したことと類比されうる。これはアイモニーノの術語でい
う「città per parti（部分としての都市）」として解釈できる。

4-2. レオナルド・ベネヴォロの参照：ファランステール

アイモニーノもロッシも、ソ連に社会主義都市の参照点を見る<sup>注
21)</sup>が、ロッシの講義では、続けて、プーレーならびにルドゥーの立
ち位置が言及され、次にユートピア主義者の建築的側面が考察され
る。オーウェン、サン・シモン、フーリエ、エティエンヌ・カペー
といった 19 世紀のユートピア主義者に関する思想の紹介には、ベ
ネヴォロの『近代都市計画の起源』が参照されている^{注22)}。

「レオナルド・ベネヴォロの研究は、確かに興味深いものであり、
カルロ・アイモニーノによるレビューのほかは、殆ど見落とされて
きたものの、今日総合的な立場のいくつかをさらに明確にするのに
有効である。ベネヴォロの結論においては我々が同意する点がある
ものの、未だ十分に発展させられていないのである。まさにこの点
で、本講義は、ユートピア主義やブルジョア層の技術者によって提
示された様々な解決法の技術的経緯を参照してきたのだ。田園都市
やオースマンのブルヴァールなどの最も奇妙な解決法は、理性の
中でそれ自体が、出発点であるところの初源的なイデオロギーのモ
チベーションに相反するようなモデルに到達してしまったのだ。

我々がこれまで着目してきたのは、まるでモダニズムの賃貸住宅
になってしまったかのような、まるでル・コルビュジエに立ち戻っ
てきたかのようなファランステールの姿である。」(*Ibid.*, p.58.)

PCI 主流派の正統教義とみなされる「ル・コルビュジエ」に連な
る流れに、シャルル・フーリエのファランステールの都市計画思想
に踏み込んだベネヴォロの議論にロッシは強い関心を抱いた。マン
フレッド・タフーリ(Manfredo TAFURI 1935-1994)の協働者であった
ヴィエリ・クィリチ(Vieri QUILICI)が言及したように^{注23)}、同時代
的に、ファランステールを評価する機運が高まっていた。ロッシも
また、エンゲルスの労働者コテージの悲惨さの説明を踏まえ、ファ
ランステールの可能性を再評価したといえる。

4-3. ファランステールの再検討：フーリエとコンシデラン

ベネヴォロは、実現したゴダンの「ファミリーステール」を「ユ
ニテ・ダビタシオン」の先取りとして評価した。一方で、ロッシは
ゴダンの計画やフーリエの思想の詳細には触れず、「〈回廊一通

路〉rue-galerie」に着目する。特に、ベネヴォロが話題に触れるに
とどまっているフーリエの弟子ヴィクトル・コンシデラン(Victor
CONSIDÉRANT, 1808-1893)の技術的内容の詳細に肉薄する。

「今やコンシデランの手管を通じて、ファランステールの建物は、
偉大な〈ユニテ・ダビタシオン〉となった。それは〈住むための機
械〉であり、類型として成功していたある種の社会的状況を超えて
決定された偉大な技術的発明であり、近代の大建築、住居一宿泊
所、宿泊所、都市住宅の大いなる類型である。」(*Ibid.*, p.51)

技術的な側面から建築において具体化しようとする軍事技術者コ
ンシデランの試みにロッシは着目し、彼が改良したファランステール
を「ユニテ・ダビタシオン」になぞらえる。コンシデランは、ファ
ランステールの建築的問題を発展させ、空気、熱、光といった環
境工学的な循環を有する建物を構想していた。

「技術者としてコンシデランは、建築的要素を集中し、ファラン
ステールの組織化に固執する。『共同体的建造物については、全てが
予見され、組織され、結合されるはずである。人は、水を支配し、
空気、熱、光を支配する。中央冷暖房装置をもって、全ての部屋に
熱水と冷水が流れるであろう。ファランステールは、様々な類型を
もつ異なる部屋に分割され、そこには家具があったり、なかったり
するが、全ての類型が均衡を保つ。』」(*Ibid.*, p.51.)

さらにフーリエと同様、ファランステールの「〈回廊一通路〉
[rue-galerie]」にコンシデランは固執したとロッシは主張する。

「しかも、コンシデランは、建物全体を循環する〈回廊一通路〉
[rue-galerie]、回廊一動線[strada-galleria]にこだわっている。それこ
そ、ファランステールの最も重要な建築的・社会的テーマである。
『共同体の建物の各面を結ぶこの回廊は、全ての部分の一つに繋ぐ
長いベルトのように働き、各端点が中央部で交わるように定める。
いわばそれは、巨大なファランステールという体での生が循環する
管であり、毛細血管に血を供給する大動脈なのだ。』」(*Ibid.*)

ロッシの技術への志向^{注24)}は、コンシデランのファランステール
の動線計画・設備計画的な側面への着目に現れる。コンシデランの
考案は「全ての部分の一つに繋ぐ長いベルトのように働き、各端点
を中央部で交わるように定める」。これは、ロッシとグラッシによ
る計画案「サン・ロッコの住宅」(1966)を彷彿させる。

4-4. 社会主義都市の理念と類推的都市：過去であり未来の建築

タフーリに「操作的歴史」と批判されかねない、こうしたロッシ
の系譜化の作業は、まさに「自伝的」な要素が、建築家の心の動き
として可視化される過程であるといえる。特に、1960 年代に多く提
案がなされたテクノユートピア的な計画に対抗し、ロッシ自身にと
って大きな意味をもっていたスターリン時代の建築を、現実の社会
主義都市で起こっている事象として再考を促している。

「私はこの問題に一社会主義都市に一面から取り組むことを模索
してきた。我々の研究の発展のなかで、それは定式化された未来予
想図を推進することを放棄する。とにかく私は、社会主義都市の建
設の参照点を構築する一連の事象を検証したいと模索してきた。私
は、それらの事象（訳補：ブルジョア都市）について過剰に反応
し、無視することは間違っていると信じている。」(*Ibid.*, p.62.)

ブルジョア都市も歴史の中にある事物であり、「非プロレタリア
的」というレッテルによって見過ごされるべきではないとロッシは
考える。『都市の建築』末尾でモスクワのスカイスクレイパーの図

版が参照された^{注25)}ように、本講義でも、ロッシは社会主義の「都市の建築」の実証例として、I.ジョルトフスキーや、I.フォーミン、A.プロフ、ヴェスニン兄弟を擁護する^{注26)}。

「とにもかくにも、一般的な問題はこうである。スターリンによる世界一大きな社会主義都市が指定したのは、新しい形態の問題であり、類型的で、具体的な、固有の問題である。これもまた、一つの社会主義都市における問題であるのだろうか？ 言及する範囲でこれには一貫性があると信じている。[...] このような形態の意志は、資本主義都市の中では可能ではないことを各々理解できるであろう。その意志が、それ自体で同じになる一つの形態的解決を表象すると各々が理解できるであろう。その他の解決法によって、表象されるのは、建築を作ろうという意志ではない。道徳順応主義とイデオロギー的機能主義は、アヴァンギャルドのニヒリスティックな潮流に同調しており、今日では白旗を挙げている。」(Ibid., p.62.)

資本主義都市の中でロッシが批判する「道徳順応主義」ないし「アヴァンギャルドのニヒリスティックな潮流」は、アーキグラムやメタボリズムの計画、丹下健三の「東京計画 1960」を指す^{注27)}。「間違いなく、社会主義都市は、新しい何かである。しかしまた、この何かは、苦難のうちに運ばれてきたあらゆる問題を包含することになるだろう。他の多くの思想もこの主題に関わることができる」と私は理解している。実際、建築の観点から、都市は大衆の新しい教育に将来的に結びつくとは私は信じる。ブルジョア都市の状況から歪められ、複雑化した建築の可能性を、作品において変革可能であるという立場からもたらされる、このように広範な弁証法的プロセスに向かっているのだ。このテーマに関連しながら、私にとって建築と都市の運命について非常に大きな意味をもつトロツキーの一節を朗読しながら、私の講義を終えたいと思う。」(Ibid., pp.62-63.)

ブルジョワ都市において「歪められ、複雑化した建築の可能性」を、ロッシはむしろ肯定的に捉える。複雑な歴史を経てしまった現在から、個々人の内面にとって重要な過去の事例を分析的に取り戻すことが、ロッシにとっての「科学」である。

こうした意味において、『都市の建築』(1966)の第 3 章の末節が「アテネ」と題されたことが理解可能となる。「ギリシア都市」のような過去が同時に、未来の建築であり、向かうはずの都市であるところの「社会主義都市」と重ね合わされる。

ロッシにとって、「社会主義都市の理念」とは、まだ見ぬ未来と、かつて純粋だったかもしれない過去の都市との重ねあわせとして捉えられる。19 世紀のブルジョア社会が作り出したヨーロッパ都市もまた、ある具体的な歴史であり、一つの現実である。「現実の都市の歴史のうちに存在しない」社会主義都市の理念とは、過去を見る建築家・研究者の内的世界にある具体的な都市のうちに見いだされる。そこでは、主流のマルクス主義の文脈では認められない、あるいは否定されるべき空想社会主義者の計画の踏査の必要性が見いだせる。この「社会主義都市の理念」は、1969 年 5 月に見いだされた^{注28)}「類推的都市」の理念との相同性が見いだせる。

4-5. トロツキー『文学と革命』の参照と傾向芸術

講義「社会主義都市の理念」の最終文は、トロツキーの一節の引用で締めくくられる。「スターリニスト」^{注29)}と批判されたロッシであるが、芸術家の自由な心の動きの表出を体現するにあたって、「トロツキスト」のレッテルすら恐れない姿勢が垣間見える。

ロッシが引用したトロツキーの建築観は、技術的党派性が大衆の心を掴むこと、人間の知性において、人工物と自然全体の調和が図られるという内容である。これはトロツキー『文学と革命』の第一部第八章「革命芸術と社会主義芸術」からの 2 箇所の引用をつなげたものである^{注30)}。

興味深いことに、この『文学と革命』第一部第五章「詩の形式派とマルクス主義」では、「傾向」概念の考察が見られる。以下のように「傾向主義」に関してトロツキーは述べる。

「芸術のその潮流が「純粋」芸術の旗のもとにあるか公然たる傾向芸術の旗のもとにあるかには全く関係がない。わがロシアの社会の発達過程において傾向主義は、人民の結びつきを模索していたインテリゲンツィアの旗印であった。」^{注31)}

トロツキーは芸術家の創作活動のテーマをプロレタリア文化の称揚に限定するような「社会主義芸術のイデオロギーの強制」があったとはならないと論じる。そして、「純粋芸術」と「傾向芸術」と対比させ、両者のせめぎあいのなかに、「リアリズム」を見出す。

「人民なしには、インテリゲンツィアは根拠も確信も抱けず、歴史的役割を果たす権利を獲得できなかったのである。しかし革命闘争のもとではこの階級的エゴイズムが裏返しになり、インテリゲンツィア左派において最高の自己犠牲という形態さえとるようになっていった。まさにそれゆえにインテリゲンツィアは傾向主義を隠さず、力の限り喧伝したのであり、他の多くのことを犠牲にしたのと同様に芸術においても芸術そのものを犠牲にすることがままあった。」^{注32)}

講義の末尾における『文学と革命』の引用は、一見するとモダニズム的な技術的進歩の称揚であるが、原文と照らし合わせると、芸術家の自由な成長のせめぎあいのなかで、トロツキーが傾向芸術の側についたことを暗示する一節でもある。ここで、当時のマルクス主義の文脈で否定的価値をもつトロツキーを、エンゲルス・レーニンの列に加えて論じることで、ロッシ自身の「傾向」を表出する意図が見出せる。

5. 結びにかえて：傾向建築をめざして

ロッシは、カトリックの宗教理念と共産主義のイデオロギーが複合した状況と思考を同世代と共有していた^{注33)}。その意味で、ロッシの語る「傾向」には、社会主義イデオロギーと宗教理念との接合が見られる。これは、同時期に考案された「類推的都市」による都市認識のプロセスと相通じる。つまり、ロッシの理論においては、術語を単なる言語的概念として一意に定めるのではなく、図的/宗教的イメージを含意しながら術語を構築する姿勢が見られる。

同時に、ジョルジュ・パタイユに共感を寄せていた^{注34)}ように、主流の価値観にあえて挑みかかる志向すら包含する。その意味で、ミラノ工科大学教授時分のアルド・ロッシは、各々の「傾向」を強調する“傾向建築”をめざし、学生を教え、導こうとしたといえる。ロッシが探究グループに向けた「設計の理論」で語る「傾向」が意味するところも、個人の心の動きを指し、それを正確に捉えることが、建築の進歩の糧となることを示す。畢竟、建築の進歩、傾向の内容は、一元的に決定されるものでも、ア・プリオリに教えられるものでない。それは、芸術家個人の生のア・ポステリオリな道の上におのずから、見いだされる。

参考文献

- 1) ANDREOLA, F.N.: *ARCHITETTURA INSEGNATA ALDO ROSSI, GIORGIO GRASSI E L'INSEGNAMENTO DELLA PROGETTAZIONE ARCHITETTONICA (1946-1979) (ARCHITECTURE TEACHED BY ALDO ROSSI, GIORGIO GRASSI AND THE TEACHING OF ARCHITECTURAL DESIGN (1946-1979))*, Dottorato di ricerca in Architettura, Scuola di Dottorato in Ingegneria Civile e Architettura Università di Bologna, 2015. (in Italian)
- 2) AURELI, P.V.: The difficult whole, *Log*, No. 9, 2007.
- 3) AURELI, P.V.: *The possibility of an absolute architecture*, The MIT Press, 2011.
- 4) AYMONINO, C.: *Il significato delle città (The Meaning of the City)*, Marsilio, 2000. (in Italian)
- 5) AYMONINO, C.: Carlo Aymonino, *Architettura Razionale 1973-2008 (Rational Architecture 1973-2008)*, CLEAN, 2008. (in Italian)
- 6) AYMONINO, C.: *Origini e sviluppo della città moderna (Origins and Development of the Modern City)*, Marsilio, 2009. (in Italian)
- 7) BENEVOLO, L.: *Kindai Toshi Keikaku no Kigen (Le origini dell'urbanistica moderna)*, tras. By YOKOYAMA, T., Kajima Institute Publishing, 1976. (in Japanese).
レオナルド・ベネヴォロ: 近代都市計画の起源, 横山正訳, 鹿島出版会, 1976.
- 8) BENEVOLO, L.: *Kindai Kenticku no Rekishi (Storia dell'architettura moderna)*, tras. by MUTO, A., Kajima Institute Publishing, 1978. (in Japanese).
レオナルド・ベネヴォロ: 近代建築の歴史, 武藤章訳, 鹿島出版会, 1978.
- 9) CONFORTI, C.: *Il Gallatese di Aymonino e Rossi 1967/1972 (The Gallatese of Aymonino and Rossi 1967/1972)*, Officina Edizioni, 1981. (in Italian)
- 10) DRUGMAN, F.: Ricordi (Memories), «Care architetture»: *Scritti su Aldo Rossi («Dear architectures»: Writings about Aldo Rossi)*, Umberto Allemandi & C., pp.43-45, 2003. (in Italian)
- 11) Gruppo di ricerca diretto da Aldo Rossi, Facoltà di Architettura del Politecnico di Milano: *L'analisi urbane e la progettazione architettonica (The Urban Analysis and Architectural Project)*, CLUP, 1970. (in Italian)
- 12) KATAGIRI, Y.: A STUDY ON TYPE AS IDEOLOGY OF THE TENDENZA MOVEMENT—Ideologies and design theories of Giorgio Grassi and Aldo Rossi—, *Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)*, Vol.81, No.736, pp.1791-1797, 2016.8. (in Japanese).
片桐悠自: テンデンツァ運動におけるイデオロギーとしての類型概念 —ジョルジョ・グラッシとアルド・ロッシにおける社会理念と造形理論—, 日本建築学会計画系論文集, Vol.81, No.736, pp.1791-1797, 2016.8.
- 13) KATAGIRI, Y.: WITTGENSTEIN'S IMPACT IN BIRTH OF THE IDEA OF CITTÀ ANALOGA—Theory of Città Analoga in beginning of *I Quaderni Azzurri* of Aldo Rossi through *Tractatus Logico-philosophicus*, *Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)*, Vol.84, No.764, pp. 2219-2225, 2019.10. (in Japanese).
片桐悠自: 「類推的都市」の概念成立におけるウィトゲンシュタインの影響 —『論理哲学論考』を介したロッシ『青のノート』の執筆開始期における「類推的都市」の理論—, 日本建築学会計画系論文集, Vol.84, No.764, pp. 2219-2225, 2019.10.
- 14) KATAGIRI, Y.: GIANUGO POLESSELLO'S ARCHITECTURAL IDEOLOGY AND “COLUMN DEBATE” WITH ALDO ROSSI —Collaboration in Architect Adolescence of Polesello-Rossi for Theoretical Contribution to La Tendenza— *Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)*, Vol.85, No.777, pp. 2437-2445, 2020.11. (in Japanese).
片桐悠自: ジャンウーゴ・ポレゼッロの設計思想とアルド・ロッシとの“円柱論争” —「ポレゼッロ-ロッシ」の青春時代の協働とテンデンツァ運動への理論的寄与—, 日本建築学会計画系論文集, Vol.85, No.777, pp. 2437-2445, 2020.11.
- 15) KLEE, P.: *KLEE NO NIKKI: PAUL KLEE TAGEBÜCHER 1898-1918 (PAUL KLEE'S DIARY)*, Misuzu Publisher, 2009. (in Japanese)
バウル・クレー, W・ケルステン(編): 新版 クレーの日記, 高橋文子訳, みすず書房, 2009.
- 16) LAMPARIELLO, B.: *Aldo Rossi e le forme del razionalismo esaltato: Dai progetti scolastici alla «città analoga» 1950-1973 (Aldo Rossi and Forms of Exalted Rationalism: From the school projects to "Analogous City" 1950-1973)*, Quodlibet Habitat, 2017.
- 17) LENIN, V. I.: *Keizaigakutekiromanshugi no Tokutyouzukeniyosete (A Characterisation of Economic Romanticism)*, Ohtsuki Shoten, 1974. (in Japanese)

- レーニン: 経済学的ロマン主義の特徴づけによせて, 田中雄三訳, 大月書店, 1974.
- 18) ORNAGHI, N., ZORZI, F.: Conversation with Arduino Cantàfora, *Log*, No.35 pp.85-96, 2015.
 - 19) POLESSELLO, G.: La classificazione del progetto (The classification of the project), *Gianugo Polesello: Architettura 1960-1992 (Documenti di Architettura)*, Electa, p.14, 1992. (in Italian)
 - 20) ROSSI, A.: Premessa (Preface), in *L'analisi urbane e la progettazione architettonica*, pp.7-8, 1970. (in Italian)
 - 21) ROSSI, A.: L'obiettivo della nostra ricerca. Lezione (The purpose of our research: Lecture), *Ibid.*, pp.13-20, 1970. (in Italian)
 - 22) ROSSI, A.: L'idea di città socialista in architettura (The Idea of Socialist City in Architecture), *Ibid.*, pp.41-63, 1970. (in Italian)
 - 23) ROSSI, A.: Le teorie della progettazione (The Theories of the Project), *Ibid.*, pp.110-127, 1970. (in Italian)
 - 24) ROSSI, A.: Entretien avec Aldo Rossi (Interview with Aldo Rossi), *L'Architecture d'Aujourd'hui*, n°190, pp.41-43, Avril 1977. (in French)
 - 25) ROSSI, A.: *A Scientific Autobiography*, MIT Press, 1981.
 - 26) ROSSI, A.: *Aldo Rossi Jiden (A Scientific Autobiography)*, tras. by Miyake, R., Kajima Institute Publishing, 1984. (in Japanese)
アルド・ロッシ: アルド・ロッシ自伝, 三宅理一訳, 鹿島出版会, 1984.
 - 27) ROSSI, A.: Le distanze invisibili (The Invisible Distances), *L'architettura italiana oggi: Racconto di una generazione*, Editori Laterza, pp.237-246, 1989. (in Italian)
 - 28) ROSSI, A.: *Toshi no kentiku (The Architecture of the City)*, Tairyudo, tras. by Fukuda, S. and Oshima, T., 1991. (in Japanese)
アルド・ロッシ: 都市の建築, 大島哲蔵, 福田晴度訳, 大龍堂書店, 1991.
 - 29) ROSSI, A.: *L'architettura della Città (The Architecture of the City)*, Città Studi Edizioni, 1995. (in Italian)
 - 30) ROSSI, A.: *I quaderni azzurri (The Blue Notebooks)*, copia anastatica a cura di Dal Co, F., Electa, 1999. (in Italian)
 - 31) ROSSI, A.: Note autobiografiche sulla mia formazione ecc. (Autobiographical notes on my education etc.), 1971, *Aldo Rossi: Tutte le opere*. editioned and illustrated by Cantàfora, A. and Ferlenga, A., Mondadori Electa, 1999. (in Italian)
 - 32) ROSSI, A.: *Scritti scelti sull'architettura e la città 1956-72 (Selected Papers on Architecture and City 1956-72)*, Quodlibet, Macerata, 2012. (in Italian)
 - 33) TAFURI, M.: *Kenchiku no teoria (Theoria e storia dell'architettura)*, tras. by YATSUKA, H., from Italian version published from Laterza in 1976, Asahi Syuppan, 1985. (in Japanese)
マンフレッド・タフーリ: 建築のテオリア, 八束はじめ訳, 朝日出版社, 1985.
 - 34) TROTSKY, L.: *Bungaku to Kakumei (Literature and Revolution)*, vol.1, Iwanami Shoten, 1993. (in Japanese)
トロツキイ: 文学と革命(上), 桑野隆訳, 岩波書店 1993.
 - 35) YATSUKA, H.: *Kibo no kukan (Toward Space of Hope)*, SUMAI Library Publishing, 1988. (in Japanese)
八束はじめ: 希望の空間—ロシア・アヴァンギャルドの都市と住宅、住まいの図書館出版局, 1988.
 - 36) YATSUKA, H.: *ARCHITECTURE OF RUSSIAN AVANT-GARDE*, LIXIL Publishing, enlarged edition in 2015. (in Japanese)
八束はじめ: ロシア・アヴァンギャルド建築 | ARCHITECTURE OF RUSSIAN AVANT-GARDE [増補版], LIXIL 出版, 2015.

注

- 注1) ロッシはミラノ工科大学において、1966年10月-1969年5月に嘱託教授[professore incaricato]、1969年6月-1971年11月に正教授[professore ordinario]の職位にあった; LAMPARIELLO (2017), p.163, p.225.
- 注2) F.ドルグマンによると、ロッシは、ソ連が行ったハンガリー侵攻の年の1956年に共産党の入党を申請した; DRUGMAN (2003), p.44. なお、ランパリエッロの資料調査によれば、1957年・1958年についてはPCIの党員証が確認されている。なお、1954年の時点でロッシは、イタリア共産党青年連盟[Federazione Giovanile Comunista Italiana]のメンバーであり、同盟のミラノ支部における記事の編集を行っていた; LAMPARIELLO (2017), p.36.
- 注3) アウレーリによればミラノ工科大学教授職を罷免された1971年にPCIを離党したとされる。本稿もこれに倣う; AURELI (2007), p.46.
- 注4) ロッシが参加した際に、アイモニーノはかなり詳細まで「ガララテーゼの集合住宅」の設計条件を詰めていた。これについてはコンフォルティ女

史が詳しい; CONFORTI (1980), pp.29-51. また、彼女の研究を踏まえ、エスキース図を収集し、両者の共同設計を再考したランパリエッロ女史の研究も参照; LAMPARIELLO (2017), pp.240-254.

注5) AYMUNINO (2008), p.30.

注6) ミラノ工科大学の「探究グループ [Gruppo di ricerca]」制度では、ロッシの他、ヴィットリオ・グレゴッティ、パオロ・ポルトゲージ、グイード・カネッラ等の教員がそれぞれグループを主宰していた。アンドレオーラ女史の博士論文の以下の箇所も参照; ANDREOLA (2015), pp.80-85.

注7) ANDREOLA (2015), pp.64-100.

注8) 資料『青のノート』は1968年から1992年までにロッシの手書き文字の手記をリプリントした資料として1997年にゲッティ財団から出版された。

注9) QA1の「教理問答[catechismo]」については以下を参照; *Ibid*.

注10) この四角囲みは、QA2、QA4にも使用される。

注11) 設計事務所 SDA(Studio di Architettura)を共同設立したポレゼッロとロッシは、似た形態文法を共有していたが、それぞれの形態選出の内的な過程は対照的であったと考えられる。建築を一種の「大アーカイブ[*grande archivio*]」として捉えたロッシにとって、台座を付けた円柱は、過去のアーカイブから取られた正当性をもつ。一方で、ポレゼッロにとって、円柱の台座は、ボザールのオーダー教育への順応であり、許容できるものではなかった。両者の設計思想の共有と相違については片桐(2020-11)を参照。

注12) 「私自身は、自分をサヴェリオ・ムラトリーの後継者の一人とはみなしていません。それでも、イタリアの順応主義者の方々には大変申し訳ないのだが、その建築学的研究には深い敬意を抱いています。なにより、私は、彼の著作を、私の友人で学生時代にムラトリーと協働したジャンウーゴ・ポレゼッロによる素晴らしい精緻な分析を通して理解しました。むしろ、この学域[*ce domaine*]について私の師は、驚嘆すべき都市のヴィジョンを私に示してくれたジュゼッペ・サモーナと、まさに（訳補：サモーナの弟子である）ジャンウーゴ・ポレゼッロの二人です。ポレゼッロは、私がトリノの「チェントロ・ディレヴィオナーレ」設計競技に参加したときの協働者です。私たちは、トリノの計画で、類型-形態学的な調査と設計行為の間の関係性に焦点を当てようとしたのです。」; ROSSI (1977), p.41.

注13) ここでの「唯名論的位置づけ」は神学的意味合いを彷彿とさせる術語であり、管見の限りロッシの術語ではあまり見かけない。中世の普遍論争における唯名論・実念論の対立を参照している可能性もある。

注14) 「何故私が成長[*la crescita*]という言葉を使うのかは次に語るとして、とりあえず、ある一つの物事の限界であり必要性として意図しているとおきたい。いうならば、成長しない子どもを見るような悲しみであるが、同時に、成長の限界^{境界}とは少年時代の喪失[*il limite della crescita è la perdita dell'infanzia*]である。」; ROSSI (1989), p.244.

注15) 「フォロ・ボナバルデは、実際、なんらかの建築的要請[*un'esigenza architettonica*]から生まれたものではなかった。それは、権力を掌握したブルジョアジーのための業務中心地区を構築し、モダニズムの相貌を自らに課すという都市の要望[*il bisogna della città di darsi un volto moderno*]から生まれたこと。このことは、人々がフォロ・ボナバルデを選択したところの[*con cui si sceelse*]、形態からも、具象的・地理的・建築学的様態からも独立している。（政治的理由から壊されるべきスフォルツェスコ城地区が選ばれたという意味での）歴史的様態からも、独立している。」（日本語版訳をもとに筆者改訳）; ロッシ (1991), pp.240-244; ROSSI(1995), pp.167-170.

注16) アウレリーは、『ある絶対建築の可能性 *The possibility of an absolute architecture*』(2011)において、単に慣習的な純粋さの意味だけでなく、「分離された *separated*」され、「断固として *resolutely*」在る様態において、「絶対性」を定義する。これはM.カッチャーリの「群島 *archipelago*」の影響に加え、ロッシの議論を踏まえたものと考えられる; AURELI (2011), ix.

注17) ル・コルビュジェについて、「ロンシャンの礼拝堂」以上に、「ラ・トゥーレット修道院」をロッシは評価する。以下を参照; ROSSI, “Il convento de La Tourette di Le Corbusier” (1960); ROSSI (2012), p.129.

注18) 『クレーの日記』では、作品制作と並行して言語化の作業が明快に行われつつ、クレー自身の感情の強度が表現されている。「『純粋な』芸術なんて、正統派の教義が教えるように単純に言うことはできない。素描とは言っても、突き詰めてみればやはりただの素描ではない。いくら独立したものとして描かれていても。素描とは象徴であり、その象徴が投影する想像上の線がより高い次元に届けば届くほど優れているのである。 […] 私たちのなかでは精神と魂とが全く別の次元へと向かって立ち上ってゆく」; クレー(2009) 高橋文子訳, p.194.

注19) ROSSI (1989), *op.cit*.

注20) ロッシが参照したアイモニーノのガルニエ「工業都市」の記述は以下

を参照; AYMUNINO, “La formazione del concetto di tipologia edilizia” (1965); AYMUNINO (2000), p.79. なお、ロッシは、ミラノ工科大学赴任前の1963-1966年に、ヴェネツィア建築大学(IUAV)でアイモニーノの助手を務めた。

注21) アイモニーノは、『モダニズム都市の起源と発展』(1965)で、ソ連の都市の発展やイワン・レオニドフの「マグニトゴルスク都市計画」(1930)を参照し、都市の発展史観的フェーズの中で、ソ連建築が果たす役割を強調する; AYMUNINO (2009), pp.53-55.

注22) 「建築における社会主義都市の理念」のpp.55-56のエンゲルス「イギリスにおける労働者階級の状態」の図版を説明する箇所は、『近代都市計画の起源』に掲載された同図とベネヴォロの記述をロッシが参照したものと考えられる; ベネヴォロ(1976)横山訳, pp.44-47.

注23) 八束はじめは革命後の都市の考案の際にコテージ（個別住居）とフアラステール（共同住居）の2つが参照例となったというクイリチの議論に言及している; 八束(1988), pp.35-37.

注24) ロッシの類型概念と技術的理念の関係は、以下を参照; 片桐(2016-08).

注25) 『都市の建築』日本語版（底本は1987年のCLUP版）の本文最後の図版はモスクワのスターリニズム建築“七姉妹”の一つ「コテルニチェスカヤの高層住宅-オフィス」の写真が用いられた。

注26) 「ここで、もしソヴィエト建築の形態分析に取り掛かるとしたら、この論述の範囲を超えてしまうことになる。最高級の人物像を表象するフォーミン、ヴェスニン兄弟、ジョルトフスキー、プロフのような建築家に言及するだけで十分だろう。有名な8つの建造物の建設のプログラムを思い起こすので十分である。モスクワ大学からレーニンの丘までにある最も有名なものは、都市の新しい相貌を決定づけたのである。」; ROSSI(1970-c), p.61.ジョルトフスキーをはじめとする「アカデミスト」を指すと考えられる建築家群については八束による以下の箇所を参照。なお、ヴェスニン兄弟はスターリンの台頭した1930年代後半には既に構成主義を否定しており、ソ連建築家連盟の名誉職についていた; 八束(2015), p.63, p.440.

注27) テクノユートピア批判については、以下を参照; 片桐(2016-08).

注28) QAにおける『類推的都市』導出の時期は以下を参照; 片桐(2019-10).

注29) ミラノ工科大学でロッシに師事し、SDAの元所員であったアルデュイーノ・カンタフォーラ(Arduino CANTAFORA, 1940-)へのインタビューを参照; ORNAGHI and ZORZI (2015), p.88.

注30) ROSSI (1970-c), p.63. ロッシの引用したトロツキーの原文の日本語訳は以下になっている。「将来—それもさきにゆけばゆくほど、めざましく—庭園都市の新たな設計とか模範住宅、鉄道、港の計画といったような類のモニュメンタルな課題が、建築技師やコンクール参加者だけで;なく広範な人民大衆を惹きつけることはまちがいない。[...]、地図とコンパスにもとづいた都市兼農村の巨大な建築へと変わってゆくだろう。このコンパスの周囲には、アジェーションをしたり、情熱を抱いていたり、集会、投票をおこなったりの真に民衆的な賛成グループと反対グループ、将来の独特な技術・建設の諸党がやってくるであろう。この闘いでは建築はふたたび、ただしもはやもっと高いレベルで、大衆の感情や気分の息吹に満たされ、人類は自らを可塑的に育むようになるだろう。つまりますます完全な生活形式を練り上げるための従順な粘土のように、世界を見ることに馴れてゆくだろう[...] 社会主義的人間は、クロライチョウやチョウザメも含めて自然全体に機械を通して号令を発しようとしており、またそうするだろう。かれは、山はどこにあるべきか、またどこで場所を譲るべきかを指示するであろう。川の流れを変えたり、大洋のために規則をつくりだすであろう。観念論的なお人好しには、こんなことは退屈に見えるかもしれない—それがお人好したるゆえンである。もちろん、だからといって地球全体が方眼紙に区分けされ、森林が公園や野菜園に変貌するというわけではない。たぶん、森の茂みも、森も、クロライチョウも、トラものころであろうが、ただしそれは人間が指示したところに残るのである。また人間はそれを極めて整然と行うので、トラは起重機に気づきもしないし、うんざりもせず、原始時代に生きていたように生きてゆくだろう。機械は大地に対立するものではない。機械とは、生活の全領域での現代人の道具である。現在の都市はうつろいやすい。だが、古い村に溶けこんで消えてしまうわけでもない。」; トロツキー(1993) 桑野隆訳, pp.335-336, p.340.

注31) トロツキー(1993) 桑野訳, p.231.

注32) *Ibid.*, p.233.

注33) カンタフォーラは、カトリックの教育を幼少の頃に受け、大学生になって共産党に入党するというのは、ロッシの世代に珍しくなかったと証言する; ORNAGHI and ZORZI (2015), p.92.

注34) ロッシは、「モデナ墓地」(1971)の趣旨文タイトルをバタイユの同名小説からとり、「空の青[*L'azzurro del cielo*]」とした; ROSSI (1999-b), p.12.

TOWARD AN ARCHITECTURE OF *TENDENZA*

Theory of *Tendenza* in “Le teorie della progettazione” of Aldo Rossi

Yuji KATAGIRI^{*1}

^{*1} Lect., Dept. of Architecture, Faculty of Architecture and Urban Design, Tokyo City University, Ph.D.

This paper examines reconstructing Aldo Rossi's lecture in term of the word *la tendenza* before establishing the movement called “La Tendenza” after the XV Milan Triennale in 1973. Focusing on the lecture titled “Le teorie della progettazione (The Theories of the Project)”, the paper detects theoretical origin of *tendenza* during the years when Rossi taught in *Politecnico di Milano* as professor.

In those years, he wrote educational articles and articulated *L'analisi urbane e la progettazione architettonica* (*The Urban Analysis and Architectural Project*), first published in March 1970, for the results of the academic year of 1968/1969. The book contains four essays written by Rossi, titled “Premessa (Preface)”, “L'obiettivo della nostra ricerca Lezione. (The purpose of our research: Lecture)”, “L'idea di città socialista in architettura (The Idea of Socialist City in Architecture)”, and “Le teorie della progettazione”.

First, it considers the first volume of *I quaderni azzurri (QA01)*, written in 19 June 1968 as Rossi's diary. Just before the academic year of 1968/69, he catechized himself and the term *tendenza* appeared. Also, he associated the idea of *tendenza* with the term of *La teoria della progettazione*.

Second, it deals with the book *L'analisi urbane e la progettazione architettonica*, in which Rossi presents the term of *tendenza* for the students and assistants in his *Gruppo di ricerca* (research group). Judging from “Premessa” and “L'obiettivo della nostra ricerca. Lezione”, Rossi demonstrates the idea of *tendenza* as common theme for the group. Following *QA01*, Rossi puts importance on *scelta e tendenza* (choise and tendency) and tries to define *tendenza* not as a stopgap manifest but as results of plurality of their researches.

Through “Le teorie della progettazione”, Rossi evaluates the urban projects in the 19th century, for example, Haussmann's reconstruction of Paris and G.A. Antolini's Foro Bonaparte Project. For Rossi, Foro Bonaparte represents precise historical moment and *una tendenza*, for it anticipates modern vision of the city, with *absolute* force in the prominence on the map as the plan.

Then, with Paul Klee's diary, Rossi explains transformation from *una tendenza* to *la tendenza* inside the artist's state of mind. In his opinion, architecture is only built for dominant class but could become architecture which could anticipate revolutionary image. Interestingly, Rossi not only regards *Bauhaus* as architecture for dominant class which could have become revolutionary but also urges the audience to doubt the dogma of architectural education that succeeds Modernist Movement.

In the lecture titled “L'idea di città socialista in architettura”, presented in advance of “Le teorie della progettazione”, Rossi reckons abandoned Utopian projects to Modernism, influenced by Carlo Aymonino's viewpoint on Tony Garnier and that of Leonardo Benevolo on the *phalanstère*. Finally, in the end of lecture, he cites the phrases of Leon Trotsky in *Literature and Revolution* (1924). Trotsky explains the art of *tendenza* in Soviet Union, which battles the compulsion of party's principles to the artists. Actually, Rossi defended Stalinist architecture in his autobiography, but he also respects the liberty of the state of mind in artist, citing from Trotsky's phrases.

Furthermore, on Socialist City, the term *tendenza* referred by Rossi from 1968 to 1970 can overlap the idea of *Città analoga*. Rossi points *tendenza* for the state of mind of artist, which enables us to investigate the process of making own works toward the architecture of *tendenza*.

(2020 年 7 月 10 日原稿受理, 2021 年 2 月 24 日採用決定)